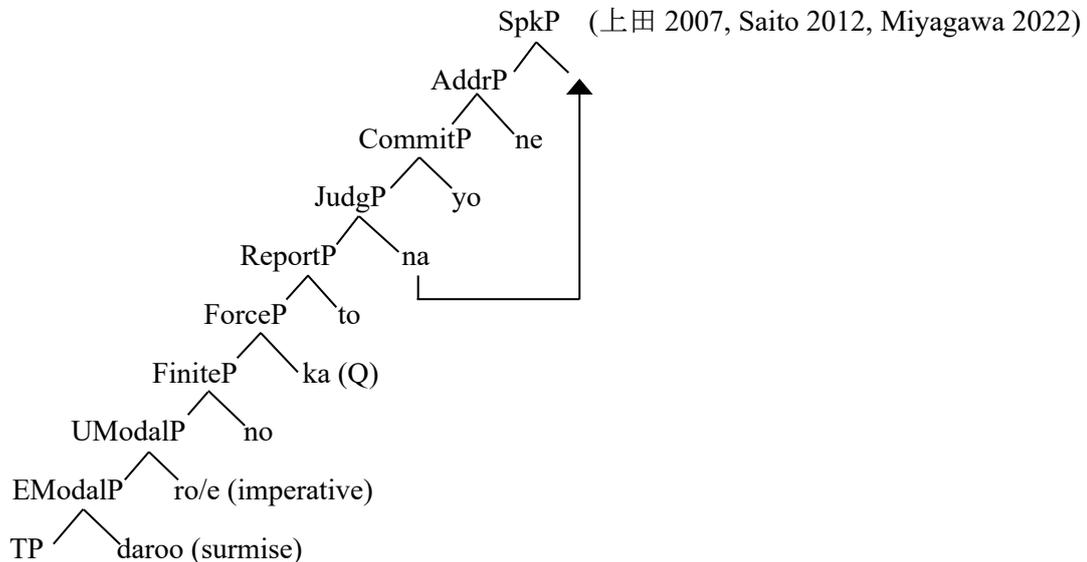


日本語のカートグラフィー研究から導かれる理論的帰結：統語

1. 序

(1)



- (2) a. 構造は、選択制限、意味解釈、発話行為から導かれるものである。このアプローチの下では、カートグラフィー構造は、全く異なるものとなる。(Saito 2015)
- b. 談話小辞の分布を考察することにより、統語論に対する帰結を導くことができるか。
1. 3次元モデル (Pan and Du 2024 他)
 2. フェイズの相対的定義 (Bošković 2015)
 3. スペルアウトされる領域は、フェイズ補部ではなく、フェイズである。
(Bošković 2016, Saito 2024)
- (3) a. 第2節：文末に見られる談話小辞の階層性
- b. 第3節：Miyagawa (2022) の仮説と議論
- c. 第4節：談話小辞と選択制限－3次元モデルへ
- d. 第5節：3次元モデルとスペルアウト領域

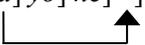
2. 談話小辞の階層性

<遠藤 (2010)、Miyagawa (2022) の分析>

- (4) a. 花子は、そこにいたわ。
b. 花子は、そこにいたよ。
c. 花子は、そこにいたね。
- (5) 花子は、そこにいたわよね。

(6) 遠藤 (2010): [_{Mod-SpeechActP} [_{Mod-EvaluativeP} [_{Mod-EvidentialP} [_{Mod-EpistemicP} TP wa] na] yo] ne] (cf. Cinque 1999)

(7) Miyagawa (2022): [_{SpeakerP} [_{AddresseeP} [_{CommitP} [_{JudgeP} CP na] yo] ne]]



<階層性の説明へ>

(8) a. 花子が来たわよ.

b. *花子が来たよわ.

(9) a. 花子が来たよね.

b. *花子が来たねよ.

(10) 花子が来たわよね.

・ わ□よ□ね/な. 「わ」は、時制を選択する。

(11) a. 私は、そこに行くわ / 行ったわ. (動詞+時制 わ)

b. 太郎は、やさしいわ / やさしかったわ. (形容詞+時制 わ)

(12) a. 花子は、来るだろう (*わ). (認識モーダル わ)

b. 太郎は、そこに行け (*わ). (発話モーダル わ)

c. だれがそこに行きますか (*わ). (補文標識 わ)

・ 選択制限により、「わ」が階層の最下位に位置することが説明される。(cf. 「ぞ」) 「よ、ね、な」には、類似する選択制限がない。

(13) a. 太郎は、そこにいるよ / いたよ. (動詞+時制 よ)

b. 太郎は、やさしいよ / やさしかったよ. (形容詞+時制 よ)

(14) a. 太郎は、そこに行くでしょうよ. (認識モーダル よ)

b. そこに行こうよ / 行きましょうよ. (発話モーダル よ)

(15) a. 花子は、そこにいるのよ. (補文標識 よ)

b. 花子は、そこにいるわよ. (談話小辞 よ)

・ 「よ」が、「か」を主要部とする CP を補部とする場合には、CP は修辭疑問文として解釈される。これは、「よ」が主張の発話行為を表すことによる。

(16) a. [_{CP} だれがそこに行くか] よ.

b. [_{CP} 太郎に何ができるか] よ.

(17) a. 太郎は、[_{CP} 花子がそこに行く] と] 思った.

b. *太郎は、[_{CP} だれがそこに行くか] 思った.

c. 太郎は、[_{CP} [_{CP} だれがそこに行く (だろう) か] と] 思った.

・ (17) は、(16) の「よ」と補部 C との間に、選択関係がないことを示す。

- ・ 発話に対する反応を促す「ね、な」にも選択制限がない。

- (18) a. 花子は、そこにいるの(ね). (補文標識 ね)
 b. 花子は、そこにいたわよ(ね). (談話小辞 ね)
- (19) a. 太郎は、そこに行きますか(ね). (補文標識 ね)
 b. 太郎は、そこに行くだろう(ね). (認識モーダル ね)
 c. 太郎は、そこに行きなさい(ね). (発話モーダル ね)

- ・ 「よ、ね、な」は、文中にも表れる(村杉恵子, p.c.)。これは、明らかに選択制限がないことと関係している。

- (20) a. 花子が(ね)、それを(ね)、食べて(ね)、...
 b. 花子が(*わ)、それを(*わ)、食べて(*わ)、...

- ・ よ□ね/な. 主張に対して反応を促すことはできるが、反応を促すことを主張することはできない。

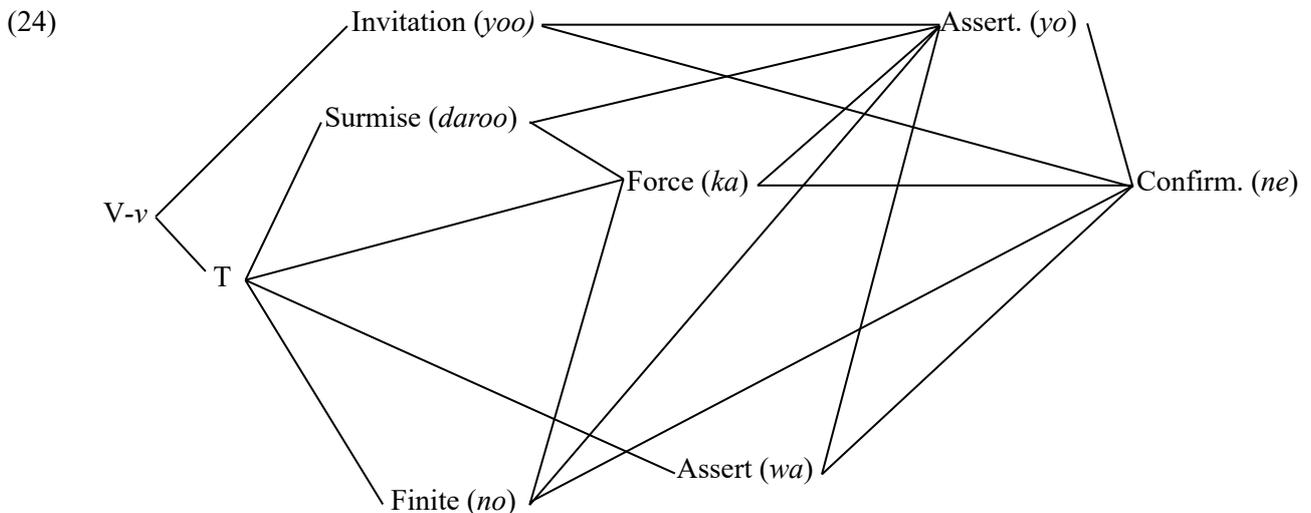
- (21) a. 花子は、明日来るよ(ね/な).
 b. 花子は、明日来るね/な(*よ).

- ・ 「ね」と「な」は、共起しない。

- (22) a. 花子は、そこにいるわよ.
 b. 花子は、そこにいるな(*ね).
 c. 花子は、そこにいるね(*な).

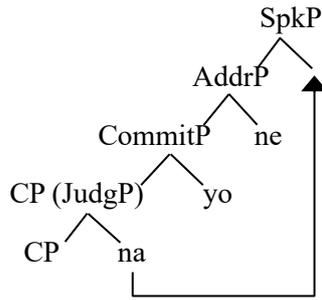
(23) 遠藤(2010)の考察

- a. 出かけたな. (独り言として可) ... 話者を含む会話参加者の反応を求める。
 b. 出かけたね. (独り言として不可) ... 聞き手の反応を求める。



3. Miyagawa (2022) の仮説と議論

(25)



3.1. 丁寧語：「ます、です」

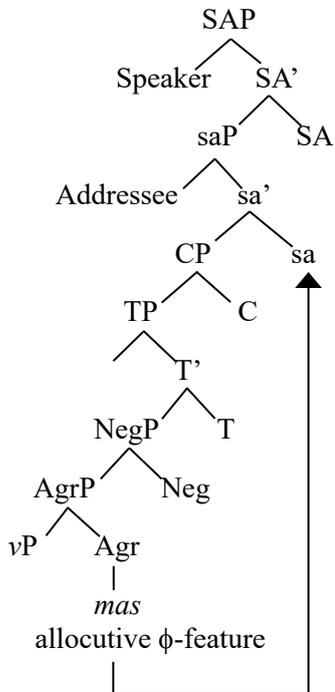
- (26) a. 花子は、ピザを *tabe-ru*.
 b. 花子は、ピザを *tab-mas-u*.
 c. 花子は、ピザを *tabe-mas-en*.

- (27) a. 太郎は、天然 *dat-ta*.
 b. 太郎は、天然 *desi-ta*.

• 韓国語、タイ語、タミル語

- (28) *Cemsim-ul mek-ess-supnita*. (韓国語)
 Lunch-ACC eat-Past-Decl.Hon_A
 'I ate lunch.'

(29)



- ・ バスク語、マガヒー語

(30) Peter worked. (バスク語スベロアン方言)

- a. Pettek lan egin dik. (To a male friend)
Peter.ERG work do.PERF AUX-3.S.ERG-2.S.COL.MASC.ALOC
- b. Pettek lan egin din. (To a female friend)
AUX-3.S.ERG-2.S.COL.FM.ALOC
- c. Pettek lan egin dizü. (To someone higher in status)
AUX-3.S.ERG-2.S.COL.FORMAL.ALOC
- d. Pettek lan egin du. (To plural addressee)
AUX-3.S.ERG

(31) a. (Nik hi) ikusi haut.
1.S.ERG 2.S.COL.ABS see.PERF AUX-2.S.COL.ABS-1.S.ERG
'I saw you.'

- b. (Zuek ni) ikusi naizue.
2.PL.ERG 1.S.ABS see.PERF AUX-1.S.ABS-2.PL.ERG
'You saw me.'

(32) a. 花子が太郎にお金を送ってくれた。/ くれました。
b. 花子が太郎にお金を送ってあげた。/ あげました。
c. 東京は、雨でございます。
d. ペンは、そこにございます。

(33) a. 僕は、寒いです。
b. #君は、寒いです。
c. 君は、寒いですか。
d. #僕は、寒いですか。 (Kuroda 1973)

< 統語論からの議論 >

(34) a. だれが来ますか。
b. *だれが来るか。
c. ビルは、[_{CP}だれが来るか] 言った。

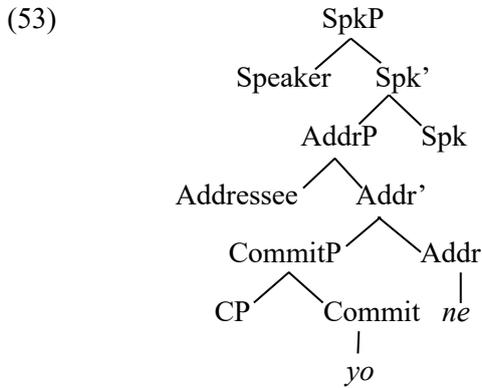
(35) *Ka* must be selected by a head. (Miyagawa 1987)

(36) a. だれが来るだろうか。
b. 僕が行こうか。
c. 帰りに、銀行に寄ってくれないか。
d. 花子は、来ないのか。

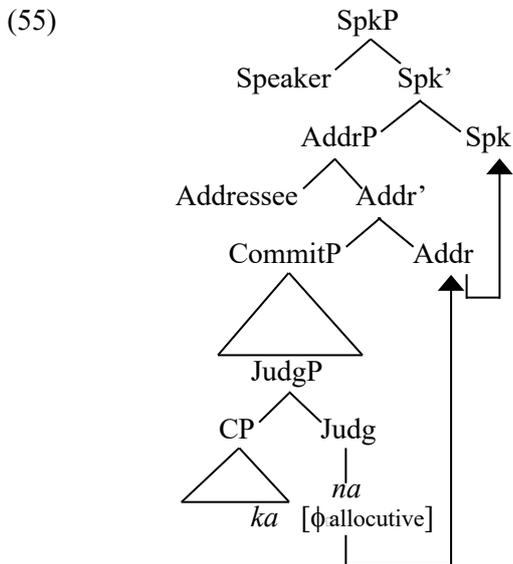
- (37) a. 君は、今日、学校に行くか。
b. だれが来るかな。
- (38) a. 花子は、行きませんでした。(Yamada 2019)
b. 花子は、天然でした。
- (39) a. 全員がそのテストを受けなかったよ。(∀ > Neg)
b. そのテストを全員が受けなかったよ。(∀ > Neg, Neg > ∀) (Miyagawa 2001)
- (40) a. 全員がそのテストを受けませんでしたよ。
b. そのテストを全員が受けませんでしたよ。
- (41) a. 太郎が [花子がアメリカへ行きますと] 言った。
b. [花子がアメリカへ行きますと] 太郎が言った。(Emonds 1970)
- (42) Emonds' (1970) root contexts
a. highest S
b. S dominated by highest S
c. reported S in direct discourse (cf. 内堀 2007)
- (43) a. [花子の子供がアメリカへ行くと] 彼女が言った。((?) 彼女 = 花子)
b. [花子の子供がアメリカへ行きますと] 彼女が言った。(* 彼女 = 花子)
- (44) Reconstruction in (42b) is forced because the allocutive ϕ -feature in the highest head of the complement is selected by the main verb. (p.59)
- (45) 太郎は [彼自身が来ますと] 言った。(p.80)
- (46) a.?*太郎は [彼自身が選ばれましたと] 言った。
b. 花子は [彼女の子供が去年ディズニーランドに行きましたと] 言った。(*彼女 = 花子)
c. 花子は [太郎が彼女の論文を褒めていますと] 言った。(*彼女 = 花子)
- (47) 「花子の子供がアメリカへ行きます」と彼女が言った。(* 彼女 = 花子)
- (48) a. 太郎は、[そこにだれがいたか] 知りたがっています。
b. *太郎は、[そこにだれがいましたか] 知りたがっています。
- (49) a. [そこにだれがいたか] 太郎は知りたがっています。
b. [太郎の妹がそこにいたか] 彼は知りたがっています。
- (50) a. Which book that John read did he like?
b. [太郎が花子に送ったどの手紙] に彼女は怒ってるの？
- (51) [太郎が花子に送った手紙に怒りを覚えますと] 彼女が言った。(* 彼女 = 花子)

3.2. 談話小辞：「よ、ね、かな」

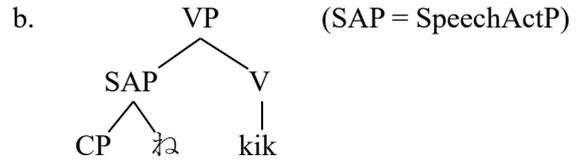
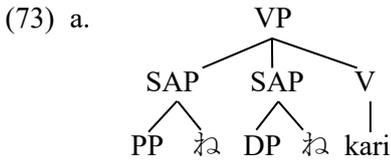
- (52) a. 花子が行くよね.
b. *花子が行くねよ.



- (54) だれが来るかな. ... *Na* selects *ka* in order to express uncertainty. (p.107)

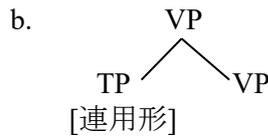
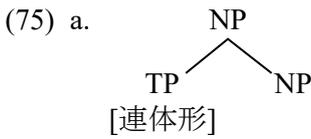


- (56) a. だれが来るかな.
b. *だれが来ますかな. ((29) + (55)) (p.110)
- (57) a. 花子は、来ますかな.
b. 花子は、天才ですな.
- (58) a. 花子は、来るかしら.
b. 花子は、来るかい.
- (59) a. *花子は、来ますかしら.
b. *花子は、来ますかい. (p.111)
- (60) a. 花子は、そんなところに行きますかしら.
b. どんな人が参加しますかしら.
- (61) 花子は、来るかしらね. (p.111)

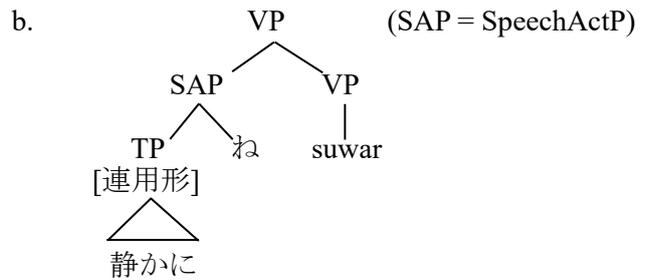
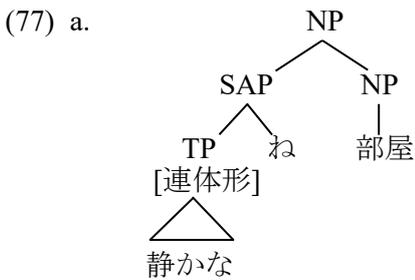


・ さらに、談話小辞は、述部屈折に影響を与えない。

- (74) a. この部屋は、静かだ. (終止形)
 b. 静かな部屋 (連体形)
 c. 花子は、静かに微笑んだ. (連用形)



- (76) a. 静かなね、部屋がね、必要です. (連体形)
 b. 花子は、静かにね、座っていました. (連用形)



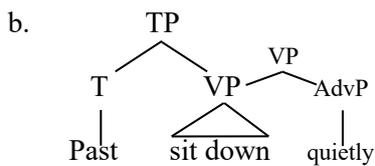
・ しかし、談話小辞は、他の談話小辞の選択関係に介在する。

- (78) a. 私は、そこに行くわ / 行ったわ. (動詞+時制 わ) ((11), (12) から再掲)
 b. 花子は、来るだろう (*わ). (認識モーダル わ)
 c. 太郎は、そこに行け (*わ). (発話モーダル わ)

- (79) a. 私は、そこに行くわ (よ).
 b. 私は、そこに行くよ (*わ).

・ 以上の事実は、談話小辞が、異なる次元に併合されることを示唆する。

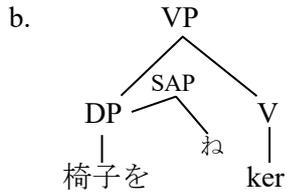
- (80) a. Mary sat down quietly. (Pan and Du 2024)



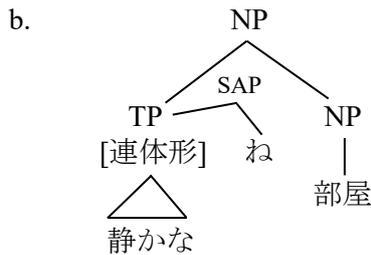
- (81) a. John goes to school.
 b. *John not goes to school.
 c. John does not go to school.

(82) Mary passionately speaks to the audience.

(83) a. 花子がね、椅子をね、蹴ったよ.

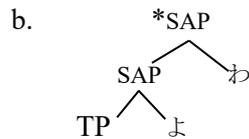
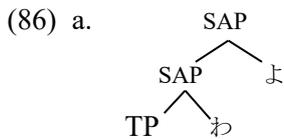


(84) a. 静かなね、部屋がね、... ((76a) より)



(85) a. 私は、そこに行くわ(よ). (= (79))

b. 私は、そこに行くよ(*わ).



5. フェイズ理論に対する可能な帰結

- 3次元構造は、線状化において問題となる。例えば、(84)において、「ね」と「部屋」の語順を決めることができない。少なくとも、APインターフェイスは、3次元構造を解釈できないと考えられる。

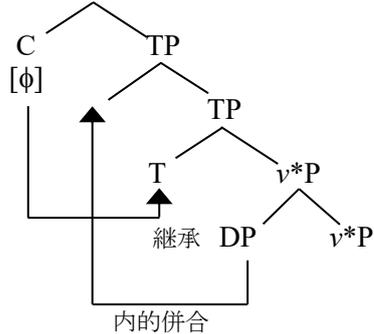
(87) a. 3次元構造は、スペルアウトされなければならない。(Epstein, Kitahara and Seely 2012)

b. この分析は、談話小辞がスペルアウト領域のみに後続できることを含意する。

c. DP、PP、CP および関係節は、スペルアウト領域である。この結論は、フェイズ補部ではなく、フェイズがスペルアウトされるとする Bošković (2016)、Saito (2024) の分析を支持するものである。

5.1. 3次元構造とスペルアウト

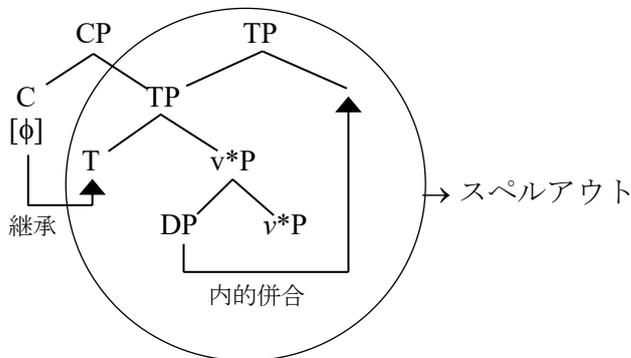
(88) CP (Chomsky 2008)



(89) a. Extension condition: Merge should form a new root. (Epstein, Kitahara and Seely 2012)

b. Merge applies to a unique root in the WorkSpace.

(90)



(91) 談話小辞は、スペルアウト領域のみに後続しうる。

<(67)~(70)再考>

(67) 花子が(ね)、それを(ね)、食べて(ね)、... (= (20a)) (DP格 談話小辞)

(68) a. 太郎がね、[PP花子から]ね、お金をね、借りてね、... (PP 談話小辞)

b. 花子がね、[CP太郎がそこにいるか]ね、知りたがってね、... (CP 談話小辞)

(69) [TP花子が好きな]ね、[NP漫画]がね、... (TP 談話小辞 NP)

(70) a. *花子ねが (*DP 談話小辞格)

b. *花子ねから (*DP 談話小辞後置詞)

(92) a. 太郎は、[CP[TP彼が行く(*ね)]と]主張した。 (*TP 談話小辞 補文標識)

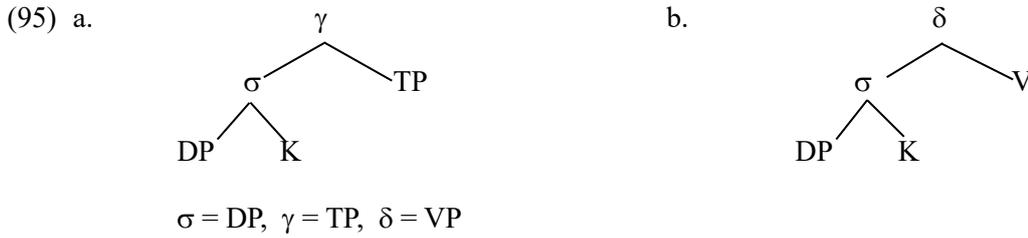
b. 花子は、[CP[TP太郎がどこにいる(*ね)]か]尋ねた。

(93) 格、後置詞は、「接辞的」要素であり、先行する要素と音韻的な語を構成する。

→ スペルアウト領域 (Kratzer and Selkirk 2007 など)

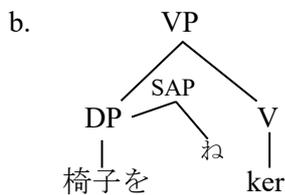
(94) a. $\underline{\text{い}} \overline{\text{ろ}} \underline{\text{が}} \underline{\text{み}} \underline{\text{が}}$ b. $\overline{\text{あ}} \underline{\text{ら}} \underline{\text{し}} \underline{\text{が}}$ c. $\underline{\text{あ}} \overline{\text{た}} \underline{\text{ま}} \underline{\text{が}}$ d. $\underline{\text{み}} \overline{\text{ず}} \underline{\text{が}}$
 L H L L L H L L L L H H L L H H

- b. $\overline{\text{い}} \overline{\text{ら}} \overline{\text{が}} \text{み} \text{(まで)}$ b. $\overline{\text{あ}} \overline{\text{ら}} \text{し} \text{(まで)}$ c. $\overline{\text{あ}} \overline{\text{た}} \overline{\text{ま}} \text{(まで)}$ d. $\text{み} \overline{\text{ず}} \text{(ま} \overline{\text{で}}$
 L H L L L L H L L L L L L H H L L L H H L



- (96) $\gamma = \{\alpha, \beta\}$ のラベルを決定するために、 γ 内を探索せよ。 α が弱主要部であるか α 内の探索が弱主要部を見いだす場合には、 β のラベルが γ のラベルとなる。
 (Saito 2024)

- (97) a. 花子がね、椅子をね、蹴ったよ。 (= (83))



- (98) a. この段階で SAP がスペルアウトされれば、SAP は 2 次元構造としてスペルアウトしうる。
 b. CP はスペルアウト領域である。[_{CP} TP C] において TP はスペルアウト領域ではないが、主文 TP および [_{NP} TP NP] における TP はスペルアウト領域である。 ((84), (85))

5.2. フェイズとスペルアウト領域の定義に関する帰結

- (99) フェイズ補部ではなく、フェイズにスペルアウトが適用される。
 (Bošković 2016, Saito 2024)

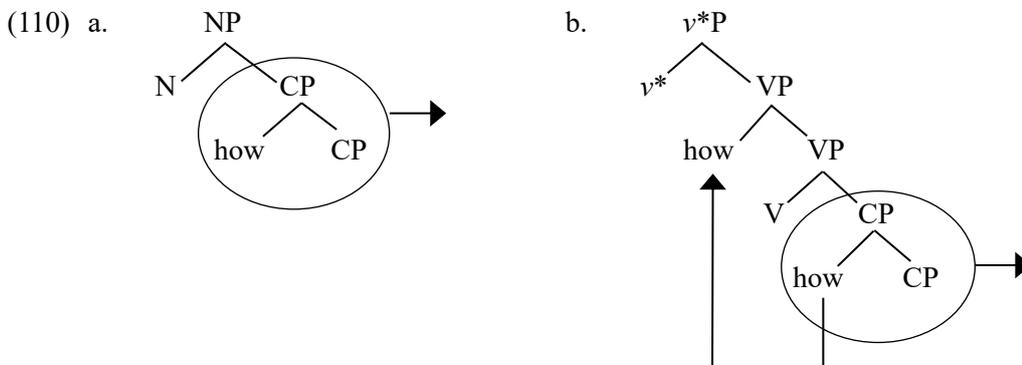
- (100) a. CP and v^*P are phases. Complements of phases are spelled out. (Chomsky 2008)
 b. Phases are spelled out upon the merger of the next phase head up. (Bošković 2016)



<ドイツ語中立叙述文における句強勢の分布> (Kratzer and Selkirk 2007)

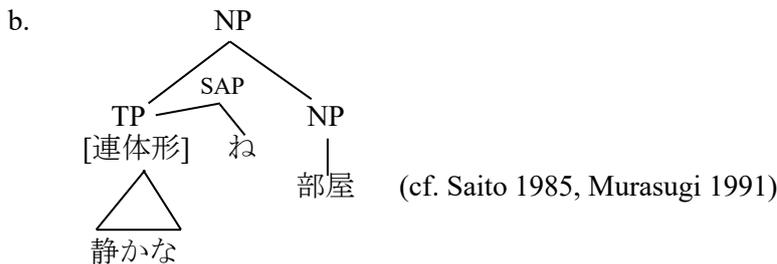
- (102) a. The spell-out domain is the prosodic domain for phrase stress.
 b. Phrase stress is assigned within the highest phrase within the spell-out domain.
 c. The elsewhere condition on prosodic spell-out: Phrase stress must be assigned within a spell-out domain with eligible material.
 (slightly modified in Bošković 2016)

- (103) Ich glaube, [CP dass [TP María [v*P die Gesetze studiert]]].
I think that Maria the laws is.studying
'I think that Maria is studying the laws.'
- (104) a. Ich hab' gelesen, [CP dass [TP [vP die Metallarbeiter gestreikt] haben]]].
I have read that the metal.workers gone.on.strike have
'I read that the metal workers went on strike.'
- b. Ich hab' gehört, [CP dass [TP der Rhein [v*P stinkt]]].
I have heard that the Rhine stinks
'I've heard that the Rhine stinks.'
- (105) a. T, V はそれぞれ C, v* から ϕ 素性とともに、フェイズ主要部としての性質を受け継ぐ。
b. フェイズは、上位のフェイズが完成した時点で解釈部門に転送される。
(Saito 2024)
- (106) 照応形の指示対象に関する情報は、照応形が意味解釈部門に転送される時に、意味解釈部門に送られなければならない。(Quicoli 2008)
- (107) a. *Mary said [CP that [TP herself witnessed it]].
b. 花子は [CP [TP 自分自身がそれを目撃した] と] 言った。
- (108) フェイズの定義 (Bošković 2015)
a. The highest projection in the thematic domain of every lexical category functions as a phase.
(For example, v*P, VP in [vP v VP], NP, AP.)
b. The highest projection in a non-thematic domain counts as a phase. (For example, CP, DP.)
- (109) a. *How did you hear [NP rumors [CP that [TP John bought a house _]]]?
b. How did you [VP think [CP that [TP a dog bit John _]]]?
c. *How are you [AP proud [CP that [TP John hired Mary _]]]?



- (111) a. How did they [VP believe [CP that [TP John hired her _]]]?
b. *How was it [VP believed [CP that [TP John hired her _]]]? (VP as a phase)

- (112) a. How is John likely [TP to fix the car _]?
 b. *How is there likely [TP to arrive someone tomorrow _]?
 c. *How is advantage [TP to be taken of Mary _]? (TP as a phase)
- (113) a. 私は、そこに行くわ/行ったわ。 (動詞+時制 わ) (= (78))
 b. 花子は、来るだろう (*わ)。 (認識モーダル わ)
 c. 太郎は、そこに行け (*わ)。 (発話モーダル わ)
- (114) a. 太郎は、[CP [TP 彼が行く (*ね)] と] 主張した。 (= (92))
 b. 花子は、[CP [TP 太郎がどこにいる (*ね)] か] 尋ねた。
- (115) a. 静かなね、部屋がね、... (= (84))



<TP/CP のイントネーションフレーズ>

- (116) [[[だ] それが今日ビール飲んだ] か] 知っとう] ? (福岡方言)
- (117) a. _{MiP}(だれが今日ビール飲んだ] か) _{MiP}(知っとう) (久保 1989)
 b. _i(_i(だれが今日ビール飲んだ) か知っとう) (Selkirk 2009)

6. 結論

- (118) a. カートグラフィー構造は、選択制限、意味解釈、発話行為から導かれるものである。
 b. このアプローチの下では、カートグラフィー構造は、全く異なるものとなる。
- (119) a. 談話小辞は、動詞-補部等の選択関係には介在しないが、他の談話小辞の選択には可視的であり、介在する。
 b. この事実は、統語構造において、談話小辞が異なる次元に属することを示唆する。
- (120) a. 解釈部門 (特に AP インターフェイス) が 2 次元構造のみを許容するのであれば、談話小辞の併合により形成された構造はスペルアウトされなければならない。
 b. この結論は、談話小辞がスペルアウトされる領域にのみ併合しうることを含意する。
- (121) a. 談話小辞は、DP, PP, CP に後続しうる。一方で、[TP C] 内の TP には後続できない。この事実は、スペルアウトされる領域が、フェイズ補部ではなく、フェイズであることの証拠となる。
 b. また、談話小辞が主文 TP に後続しうる事実は、Bošković (2015) が提案するフェイズの相対的定義を支持するものである。

参照文献

- Bošković, Željko (2015) “From the Complex NP Constraint to Everything: On Deep Extractions across Categories,” *The Linguistic Review* 32: 603-669.
- Bošković, Željko (2016) “What is Sent to Spell-out is Phases, Not Phase Complements,” *Linguistica* 56: 25-66.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” in Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, eds., *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, Cambridge, Mass.: MIT Press, 133-166.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-linguistic Perspective*, Oxford: Oxford University Press.
- Emonds, Joseph (1970) *Root and Structure-Preserving Transformations*, Ph.D. dissertation, MIT.
- 遠藤善雄 (2010) 「終助詞のカートグラフィー」長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて』東京：開拓社, 67-94.
- Epstein, Samuel David, Hisatsugu Kitahara and T. Daniel Seely (2012) “Structure Building That Can’t Be!”, in Myriam Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala, eds., *Ways of Structure Building*, Oxford: Oxford University Press, 253-270.
- Kratzer, Angelika and Elizabeth Selkirk (2007) “Phase Theory and Prosodic Spellout: The Case of Verbs,” *The Linguistic Review* 24: 93-135.
- 久保智之 (1989) 「福岡市方言のダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』156: 71-82.
- Kuroda, S. Y. (1973) “Where Epistemology, Style, and Grammar Meet: A Case Study from Japanese,” in Stephen Anderson and Paul Kiparsky, eds., *A Festschrift for Morris Halle*, New York: Holt, Rinehart, and Winston 377-391.
- Miyagawa, Shigeru (1987) “LF Affix Raising in Japanese,” *Linguistic Inquiry* 18: 362-367.
- Miyagawa, Shigeru (2001) “The EPP, Scrambling and *Wh*-in-Situ,” in Michael Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A Life in Language*, Cambridge, Mass.: MIT Press, 293-338.
- Miyagawa, Shigeru (2022) *Syntax in the Treetops*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Murasugi, Keiko (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability, and Acquisition*, Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Pan, Victor Junnan and Yuqiao Du (2024) “A Multi-dimensional Derivation Model under the Free-MERGE System: Labor Division between Syntax and the C-I Interface,” *The Linguistic Review* 41: 85-117.
- Quicoli, Carlos (2008) “Anaphora by Phase,” *Syntax* 11: 299-329.
- Saito, Mamoru (1985) *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru (2012) “Sentence Types and the Japanese Right Periphery,” in Günther Grewendorf and Thomas Ede Zimmermann, eds., *Discourse and Grammar: From Sentence Types to Lexical Categories*, Berlin: Mouton de Gruyter, 147-175.
- Saito, Mamoru (2015) “Cartography and Selection: Case Studies in Japanese,” in Ur Shlonsky, ed., *Beyond Functional Sequence*, Oxford: Oxford University Press, 255-274.
- Saito, M. (2024) “On Minimal Yield and Form Copy: Evidence from East Asian Languages,” *The Linguistic Review* 41: 59-84.
- Selkirk, Elizabeth (2009) “On Clause and Intonational Phrase in Japanese: The Syntactic Grounding of Prosodic Constituent Structure,” 『言語研究』136: 35-73.
- 内堀朝子 (2007) 「モダリティ要素による認可の(非)不透明領域—『こと』『よう(に(と))』が導く命令・祈願表現をめぐる」長谷川信子編『日本語の主文現象—統語構造とモダリティ』東京：ひつじ書房, 295-330.

上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」長谷川信子編『日本語の主文現象—統語構造とモダリティ』東京：ひつじ書房, 261-294.

Yamada, Akitaka (2019) *The Syntax, Semantics and Pragmatics of Japanese Addressee-Honorific Markers*, Ph.D. dissertation, Georgetown University.